テオリコン

M. A. Кондратюк (Kondratyuk) 著

(翻訳)

伊　藤　　正

(1994年10月17日　受理)

Tadashi ITO

137　奴隷制に立脚するアテネ民主政の最盛期は，前5世紀の中葉に始まり，ほぼ120年以上間断なく続いたが，アリストテレスがすでに指摘したように（Pol. 1292b-1293a），この民主政は *μισθοφορία* すなわち国政への参与の代償としての市民への金の支給，のおかげで，実現しえた。通称，観劇（あるいは見世物）手当とよばれている国庫からの貧しい市民への支給，即ちテオリカ—これもまたアテネ国家の社会政策の重要な部分であった—は，ディオニュシアおよびパンアテナイア祭に参加しつつ，高度なアテネ文化に接する機会を彼らに与えるものであった。前4世紀20年代の政治家の一人デマデースはこれらの手当を「民主政の絆」とよんだ（Plut. Mor. 1011b）。

μισθοφορία の導入を現代の歴史書の中で人々は，十分な根拠をもってペリクレスの時代に帰している。また，しばしば観劇手当の支給の創始をも彼に帰する，彼の広大な社会計画実現の過程において，また民主政強化の目的として。このテオリカ導入の最も早い年代付けは，おそらく，プルタルコス（Per. 9）にさかのぼる。彼は『アテナイ人の国制』のその一節をほとんど逐語的に伝えているが，そこではペリクレスとキモンの争いが語られている。アリストテレスはその中でペリクレスによる陪審廷での手当の創始を説明している（*μισθοφόρα τὰ δικαστήρια* — Arist. A.P. 27. 3-4）。だが，プルタルコスは，アリストテレスのこの証言を伝えるだけでは満足せず，「ペリクレスの力が民衆のもとでいかに強大であったか」を証明せんがために，観劇手当の支給を含めて，彼の活動に関する一連の出来事を詳細に（出典の引用なしに），その際誤りをおかし誇張しつつ，書き加えている。現代の歴史家はその誤りと誇張がプルタルコスによるものだということを認めている。例えば，彼はこの節でこのように書いている。ペリクレスは陪審員ばかりではなく，他の職務にも手当を導入した。彼は金を分配することによって民衆を買収しアレイオス・パゴス評議会と対抗するために民衆をはじめて利用したと。ペリクレスによる観劇手当に関していえば，以下のことを仮定するのは我々にはむずかしいように思われる，つまりアリストテレスが自著の『アテナイ人の国制』の最初の部分でアテネ民主政の歴史を段階的に叙述しながら，またその際に民主政の指導者の活動に特に大きな注意を払っているにもかかわらず，ペリクレスの箇所で民主的制度にとって

これほど重要な方策をうっかり言及し忘れるというようなことは。

しばしば現代の文献の中では，アリストテレスによって言及されている2オボロス（ディオーベリア）の手当が観劇手当の導入と見做されている。ディオーベリアは，彼の言葉に従えば，クレオポンによってはじめて導入された（*ὃς --- τὴν διωβελίαν ἐπόρισε πρῶτος*）。アリストテレスは，これらの金の分配はしばらくの間（*χρόνον τινα*）実施されたと記し，そしてクレオポンをデマゴーグの一人と見做している。何故なら彼らはなによりも一番に，多くの人々に気に入られるようにしたかった（Ath.Pol. 28. 3-4）のである。アリストテレス自身は用語において非常に正確であるが，注目しなければならないのは，この2オボロスを観劇手当と同一視していない点である。彼は『アテナイ人の国制』の後半部分で，自分の時代すなわち前4世紀40－30年代のアテネの国制を叙述しつつ，観劇手当について言及している（もっと正確に言えば，資金について，その資金から手当が支払われた）。

現代の文献の中で以下のような意見に出会うことができる。つまり金の分配のシステムは，ペリクレスによって導入されて，明らかに前4世紀に再開された，そしてその際，前5世紀末に導入されていた市民への2オボロスの分配と一体となったと。[1] ところがときとして，この2オボロスは何
138 らの論拠も示されることなく，観劇手当（それはクレオポンによって前410年に導入されたらしいのだが）と同一視されている。[2]

一部の学者は，観劇手当（*θεωρικά*）の分配をアギュルリオスが導入したとするハルポクラティオンの主張を受け入れている。[3] 我々はアリストテレスの『アテナイ人の国制』より，アギュルリオスが最初に民会出席手当を導入した人物であることを（41.3）知っており，もしかしたら，ハルポクラティオンが民会出席手当と観劇手当とを同一視したのかもしれない。カールシュテットはかつて，ユスティヌス（VI.9.2）を引用しつつ，テオリカの支給は前362年以降に導入されたと述べた。[4] コークウェルはエウブーロスに関する詳細な論文の中で，次のように指摘している。アリストパネスの『女の議会』や『プルートス』にテオリカへの言及が欠如していることは，カールシュテットの見方の強い裏付けであり，またテオリカ支給の導入年代を早い時期におく証言は，それほど説得力のあるものではないことを認めさせると。だが，コークウェルはカールシュテットのとった年代には賛成せず，前362年に，またそのあとに続く数年間に，アテネは軍事行動に参加した，そしてその数年の間，分配のための金はおそらく無かったはずだという全くもっともな指摘をしている。彼の意見に従えば，テオリカの導入は前4世紀中葉（前355年かその直後）に属し，そしてこの金の分配をエウブーロスの仕事に結びつけるという推定がより都合がよい。[5]

もし前5世紀に合わせて「観劇手当」―テオリカ，あるいは上で指摘したように人々がしばしばそれを観劇手当と同一視しているディオーベリアの話をするとすれば，「観劇資金」―*τὸ θεωρικόν* やテオリコンを管理する人（あるいは人々）―*ὁ(οἱ) ἐπὶ τὸ θεωρικόν*[6] といった用語は前4世紀に現れることになる。テオリコンに関する諸証言は大体において前4世紀第三四半期に属するが，これはおそらく偶然ではないであろう。この時期にテオリコンはアテネ国庫のもっとも重要な資金になり，またその長はアテネのもっとも有力な政治家になっている。[7]

139 テオリコンの管理に関しての重要なデータは，アイスキネスとアリストテレスの中にある。双方の著者は観劇資金の長である同僚団の存在を証明している（Arist. A.P. 47. 2; Aesch. III. 25）。この同僚団にどれほどの人が加わっていたかについて，我々は確かなデータを有していない。ブキャナンはそれは常に10名から成っていたと考えている（おそらく，いくつかの別のアテネの役人団との類似に従って）[8]。だがアッティカ碑文の一つには，テオリコンの長として— *ἐπὶ τὸ θεωρικόν* —ただ一名が言及されており，その人物ケーフィソフォーンは，おそらく，その年（前343／2あるいは340年）にテオリコンの唯一の役人であった[9]。そのため，この問題は議論の余地が残っている。

テオリコンを管理した役職は，アリストテレスが『アテナイ人の国制』を書いたその当時は，どんな場合でも選挙によって選出された。その職の選出は，籤（アテネで大部分の役職がそうであったように）ではなく，「挙手」でおこなわれた。そのためその職は少数の役職と同列であり（例えば，軍事やある種の財務官職のような），それらの役職は高度な熟練した候補者を要求したし，大きな財政資金を運営する能力と結びついていた（Arist. A.P. 43.1; 46.1; 61.1, 3-7）。

テオリコンの長であった役人はパンアテナイア祭からパンアテナイア祭まで職務を務めたというアリストテレスのコメント（A.P. 43.1）は，現代の歴史書の中でもっとも相反する解釈を呼び起こした。Pickard-Cambridge，Glotz および幾人かの他の歴史家は，『アテナイ人の国制』のこの一節を根拠に，観劇資金の長たちは4年間にわたってその職についたと考えている[10]。アリストテレスの表現— *ἐκ Παναθηναίων εἰς Παναθήναια* は，職は一年任期だったがそれに4年以上つくことはできなかったとも理解できる。中でも Fine は以下のように見做している，つまり，アリストテレスはほぼ定期的に4年ごとにおこなわれる大パンアテナイア祭を引き合いに出しているのではなく（Ferguson が主張しているように[11]），毎年おこなわれる祭のことをいっている，だが，この一年任期の同僚団のメンバーが選出されたので，彼らは例えばストラテーゴスのように再選されえたのだ[12]，と。残念ながら，目下のところ，乏しい碑文証言の諸研究もまた，テオリコンの長の在職期間の長さに関する問題を解く，あるいは解明する助けにはならない[13]。

毎年国家によって割り当てられたテオリコンの額の問題は興味深い。Jones はテオリコンの資金のわずかなことについて書き，15タラントンを観劇のために市民に分配される金の相当額と見做している[14]。しかしながら彼は以下のことを考慮に入れていない，つまり，観劇手当分配の職務のみがテオリコンに関する委員会の仕事ではなかったということを—見世物に，おそらく，観劇基金（ファンド）（*τὰ περιόντα χρήματα τῆς διοικήσεως* — Dem. LIX. 4）に入った金の大きくない部分のみが当てられた。Rhodes の見解に従えば，割当額の大きさは年15から100タラントンまで変動した[15]。ある時期，特にアテネにとって苦難の時代—例えば，軍事行動（とりわけ同盟市戦争）がおこったときのような—に，観劇基金への割当額は，小さくなるか全く生じさえしなかったことは明白である[16]。

エウブーロスは，ほぼ前354～350年にテオリコンを管掌した同僚団のメンバーであったが[17]，この職について2，3年後に，ある法を通過させたことは有名である。その法によれば，すべての剰余金はこの基金に回さなければならなかった。デモステネスの弁論『第一オリュントス』への解題

の中でリバニオスが書いているように，エウブーロスの法によれば，「観劇資金を軍事資金に向けようとする」ありとあらゆる試みは，違法であるとして禁止されていた。逆にデモステネスは，数
140 年間にわたってこの法の廃止のために闘い，前339年の中頃に成功をおさめ，そのときテオリコンは（一時的に）軍事資金に組み入れられた。[18] 観劇資金の軍事資金への転用のための長期にわたる，時にははげしい闘いは，テオリコンがこの時代にはなはだ高額であったことを証明することができる。[19] デモステネスの諸弁論より判断すれば（I.19-20; III.10-11），すでに40年代の初めからテオリコンの中にかなり相当な金額が回され始めている。また，同じく彼の証言によれば（XIII. 2; IV. 28-29），50年代末にまだ基金は取るに足らぬ額だったにもかかわらず。

テオリコンを管掌した同僚団のメンバーたちの活動に関する史料の情報から，我々は以下のことを推定しうる，つまりこの同僚団は非常に大きな諸権限を有していた，また，テオリコンからの金は決して見世物興行にのみ分配されたのではなかったということを。この問題についてさらに詳しく述べよう。

前4世紀におけるアテネの経済的繁栄は，周知のように，エウブーロスとリュクルゴスの時代に達成された。彼らはアテネの財政政策を指導した，そして実際に国家のすべての金を切り盛りした優れた政治家として歴史に名をとどめた。エウブーロスはテオリコンを管掌した同僚団のメンバーとしてアテネ財政を指導した，そしてまさに彼の時代に財政上の諸官職がはじめて一人物の手中に集中した。同じくこの情況は，さらにのちのリュクルゴスの時代にも保持された。史料に以下のことがしるされている，つまりリュクルゴスは *ὁ ἐπὶ τῇ διοικήσει* の職について（Hyper. Fr. 23 118）12年間アテネの財政を指導した（*τὰς προσόδους τῆς πόλεως διοικήσας* — Diod. XVI. 88）と。Mitchel はリュクルゴスの活動について叙述した論文の中で，つまりアテネ人はリュクルゴスのために特別の権力と在職期間をもつ特別の財務官職を創設したのだと主張し，[20] Rhodes も同様に推定している。[21] W.Tarn はリュクルゴスの職についていくらか慎重に自説を述べている。彼はリュクルゴスが特別の大権を有していたのだと見做した。即ち存在している大部分の財務官職—テオリコン同僚団のメンバーや戦争基金の長—は，彼と手を結んでいた人々によって占められ，そうすることでリュクルゴスは12年間にわたってすべてのアテネの財政を統制した。が，実際にいかなる職に彼がついていたかを Tarn は明確にしていない。[22] リュクルゴスがテオリコンの長としてアテネ財政を指導した，との見方もある。[23]

だが，他の人々も同一の地位についたということを指摘する必要がある。デモステネスに対する弁論においてヒュペレイデスはこのように記している。民衆はすべての金を管理する目的でデモステネスを財務官に選出したと—[*ἐ*]*πὶ τὴν δι*[*οίκησιν τῶ*]*ν αὐτοῦ ἅπασαν* [*ταμ*]*ίαν ἐχειροτόνησ*[*εν*･･･(v.28)。D.M.Lewis は，この吟味よりここにテオリコンの同僚団の長としてのデモステネスを想定している。[24] 同じ職にアイスキネスの兄弟アフォベートスもまたついた。アイスキネスの言葉によれば，人々が彼を *ἐπὶ τὴν κοινὴν διοίκησιν* に選んだとき（Aesch. II. 149），アフォベートスは上手にかつ公正に歳入を管理した。また，推定されているように，アフォベート

スは，エウブーロスの後を継いで国庫の長の地位についた。デモステネスの弁論の一つに，*οἱ τὰ*
141 *κοινὰ διοικοῦντες* (XXIII, 209) についての言及があるが，彼らはこの弁論の文脈の中でテオリコンの同僚団のメンバーと見做されうる。

デモステネスの弁論での観劇基金の表現は，特徴的である。*θεωρικά* の語（III, 31）はめったに現れず，明らかにテオリコンの資金について語っているいくつかの箇所では，もっとも一般的な用語—*τὰ κοινά* が用いられている（例えば，VIII, 21; XIII, 1)。またテオリコンの資金の次のような表現—*τὰ περιόντα χρήματα τῆς διοικήσεως* も現れる。事実，この表現はデモステネスの弁論の文脈において，同程度に軍事資金— *τὰ στρατιωτικά* にも適応できる（LIX, 4)。

国庫の長の職の表現は *ὁ ἐπὶ τῇ διοικήσει* あるいは（*ταμίας*）*ἐπὶ τὴν* (*κοινὴν*) *διοίκησιν* であるが，それは文献史料にも碑文史料にも記録されている（Hyper. Fr. 23 (118); Dem.V. 28; Aesch. II. 149; Hesperia. 1960. V. XXIX. Not.1）が，アリストテレスの『アテナイ人の国制』には言及されていないということに注意を払わねばならない。これについて，おそらくアリストテレスが自分の論文を書いたその時代に，このような職は存在しなかったからであるという説明はできないであろう。というのも『違法な使節に関する』アイスキネスの弁論は，そこで弁論家はこの職について語り，その職に彼の兄弟アフォベートスがついていたのだが，すでに前343年におこなわれたものであるから。つまり，アリストテレスの『アテナイ人の国制』脱稿のずっと以前に。おそらく，この用語はアリストテレスによって *τὰ στρατιωτικά* や（特に）*τὸ θεωρικόν* といった用語の同義語と見做されていたのかもしれない。前４世紀50－20年代のテオリコンはその大きな役割のゆえに，弁論家たちの用語上の不明瞭さをかなりの程度説明することができる。即ちテオリコンの長は，実際上まったく国庫の長と見做されえたのである。

エウブーロスとリュクルゴスが国家の財政を管理していた年に，アテネ国家の収入は著しく増大した。前355年に歳入が130タラントンであったとすれば（Dem.X. 37)，前346年にアテネの収入は，400タラントンまで増え（Dem.X. 38; Theop. Fr.166)，そしてすでにこの時期に前５世紀の国家の経済的繁栄のどの時期よりも，高かった。[25] リュクルゴスは伝プルタルコスの彼の伝記で指摘されているように，彼自身，あるいは彼の友人のうちの一人を通してアテネ財政を指導したが，彼のもとで前338年から前326年まで，収入は600タラントンから1200タラントンまで増大した。[26] パウサニアスを信ずれば，リュクルゴスのもとで，国庫にはペリクレス時代をしのぐ6500タラントンがあった（Paus.I. 29.16)。

エウブーロスとリュクルゴスが，それほど大きな歳入の増加を，いかなる方法で達成したか，簡単に推定することができる。見たところ，まさにエウブーロスの時代にメトイコイの活発な誘致策が始まった。同盟市戦争以降の時代に属する，エンクテーシス—土地と家の所有権—賦与に関する数多くの碑文がこれを証明している。[27] この政策はリュクルゴスの時代にも幅広くおこなわれた。

前355年からアッティカの銀鉱山が活発に採掘されているが，ポーレータイ碑文，法廷弁論とトリコスにおける考古学的発掘の成果がこれを証明している。最も盛んにおこなわれた鉱山の採掘は，

およそ前350／49～341／40年に観測されている。Lauffer の意見に従えば，ここで使用されている奴隷の数から前4世紀30年代の初めにおける鉱山労働の規模を明らかにすることができる[28]。したがって，ラウレイオン銀山の採掘はエウブーロスとリュクルゴスの活動の時代に活発になっていることがわかる。

142

エウブーロスとリュクルゴスの時代に，国家から貸し出された鉱山に投入された資本に，免税（アテレイア）が導入された[29]。鉱山は唯一ではなかったが，アテネ国家の豊富かつ規則正しい収入の最も重要な源であった。大量に発行されている，良質の銀の「ふくろう」は国際市場で圧倒的に多かった[30]。その後，マケドニアのアレクサンドロスの東方征服の結果，貴金属や別の貨幣システムが流入し，そのためいたるところで存在した交換手段としてのアッティカ貨幣システムはそれに取って代わられることになった。このことが鉱山の重要性の段階的な低下を招来した[31]。

またエウブーロスとリュクルゴスは商業の発達を奨励した。デモステネス全集の前340～330年代の弁論から，商人の中に多くの外人がいたことが分かる。もしかしたらエウブーロスの時代に法廷が創設されたのかもしれない。そして，その法廷において商業上の訴訟は1ヶ月の間に判決が下されなければならなかった[32]。

30年間にほぼ10倍という歳入の増加を導いたアテネ政治家の活発な経済および財政政策は，アテネ史上最大の艦隊を作り出し，大規模な建造活動を繰り広げることを可能にした。前357／6年初めにアテネで283隻だったとすれば（IG II^2 1611 l.9），前353／2年にすでに349隻にのぼった（IG II^2 1613 l. 302），前330／29年に410隻（IG II^2 1627 l. 266-78），その上，それらの中には以前よりも大きな船が多数あった。またエウブーロスの時代に船渠（ドック）が修理された。リュクルゴスは，エウブーロスによって始められていたペイライエウスにおける372隻の三段櫂船のための石造のドック，およびゼア港における海事兵器庫の建築を完了させた[33]。結局のところアテネは，前4世紀30年代にエーゲ海において最強の艦隊を有した。同時に海上貿易におけるさまざまな新機軸が広く普及する—即ち海上貸付が発達している—，この海上貸付の目的は人民に食料供給を確保することであった。そのためにアテネに入港しない船舶への貸付を禁ずる法が発布されている。（Ps. -Dem. XXXV.51）。デモステネス全集の諸弁論によれば，アテネはエーゲ海における経済活動の最も重要な中心地となった[34]。これはエウブーロスとリュクルゴスの集中的な活動の結果としてアテネに強大な艦隊が存在した，まさにそのおかげであった。

以上において次のことが指摘された，つまりエウブーロスはテオリコンの同僚団の長としてアテネ経済強化のための自分の諸政策をおこなったのだと。また古代の著作家の証言に従えば，さらにのちに，テオリコンの同僚団はリュクルゴスが国庫の長であったときに，非常に大きな権限を有した。そして，そのメンバーたちは種々の公的な仕事に加わった。アリストテレスによれば，テオリコンの職にある人々は（…*τῶν ἐπί τὸ θεωρικόν*…）ポーレータイや軍事財務官と共に鉱山賃貸借に関する入札をおこなっている（A.P. 47. 2）。特にデモステネスに対してなされたアイスキネスの弁論『クテーシフォーンに対して』の一節（Aesch. III. 25）がテオリコンの同僚団の多様な活

143

動の証言として興味をひく。この弁論は前336年に準備されたが，前330年におこなわれた。同僚団のメンバーたちは，アイスキネスの言によれば，兵器庫の建設と造船所を管理し，道を開鑿している。つまり彼らはアンティグラフェウス（Rhodes の推定に従えば，それはブーレーの書記として財政上の職務を果たした[35]）や，通常国家に支払われた金額を受け取ったアポデクタイ（Arist. A.P. 47.5; 48.1; 52.3）のような，そのような財政的な仕事に以前に従事していた役人に取って代わった。もちろん次のことは考慮に入れるべきである。アイスキネスは，彼の意見によれば，デモステネスの権力の絶大さを示そうとして，ある種の誇張をなしえた，と。

コークウェルが推定しているように，デモステネスと彼の支持者たちは前341／40年からアテネの財政を監督下においた。他方，前337／6年にデモステネス自身はテオリコンを管理し始めた（*ἐπὶ τὸ θεωρικόν* — Aesch. III. 24; ･･･ *ἐπὶ τῷ θεωρικῷ τότε ὤν* ･･･ — Dem. XVIII. 113）。そして，もしかしたら，まさにテオリコンの同僚団の長として市の城壁の建設に加わった（Aesch. III. 24-27; Dem. XVIII. 113）[36]。反マケドニアの活動家たちのグループの手中へのこのような権力の集中は，都市強化のための大事業を実施することを可能にし，また，彼らの政敵の公然たる不平をひきおこした。前337／6年，あるいはその直後[37]にデモステネスの政敵ヘゲモーンの動議に従って（IG II^2 1628 l.300; Aesch. III. 25; Dem. XVIII. 285），法が採択され，その法によって以前の財政上の役職が復活した。つまり，テオリコンの同僚団の役割は縮小された。だがこの法は，おそらく長くは存在しなかった。ヘゲモーンの法が効力をもったわずかな時期を除いて，テオリコンを管掌した同僚団は，まずブーレーに属している別の財政諸官職に自らが取って代わることによって[38]，国家のすべての財政を統制した。この結果，アテネ国家のこの最も重要で民主的な機関の諸機能に変化をもたらした。

このようなわけで，アテネ史におけるテオリコンの役割ははなはだ重要な意味をもった。特にアテネの制度，アテネ民主政の最盛期の所産でもあり，かつ貧しい市民の社会的特権であったテオリコンは，狭い社会的意義以上に，はるかに大きな意義をもった。テオリコンの金は祭祀に使われたばかりではなく，軍艦，海上交易，大規模な建築事業のような，様々な公的事業にも用いられた（Dem. III. 29; XIII. 1-3; Aesch. III. 31, 35; Hyper. V Dem.Col. 28），このことは，ポリスの経済を，アテネ民主政の社会的基礎を，また国家の軍事的な力を強化した。前４世紀50－30年代におけるテオリコンは，前５世紀に年賦金（ポロス）が果たしたのとほぼ同じ役割をアテネ経済に及ぼした。だがアテネが，アテネ海上同盟の長として，この同盟に入ってきた財源を国家のために利用しえた時代とは異なり，１世紀のちのアテネは国内の財源を犠牲にしてのみ，統一的財政策のおかげで，経済的な最盛期に到達した。ここにおいてエウブーロスが，のちにはリュクルゴスが特別な地位を占めた。しかしながら，ポリスの経済強化とその社会政治的安定を促進した財政の安定性は，永続しなかった。前322年以降，アテネにおける民主政の廃止とともに，その所産であり，そしてその歴史に少なからぬ決定的な役割を演じたテオリコンも，その存在に終止符を打った。

註

1 *Pickard-Cambridge A.W.* Macedonian Supremacy in Greece // CAH.V. VI. P.222.

2 cf. *Аристотель.* Афинская полития. Moscow, 1937. C.111, 489（С. И. Радциг の注釈）; *Benseler.* Griechisch-Deutsches Wörterbuch. Lpz-B., 1911. S.415 — *τὰ θεωρικά*(sc. *χρήματα*).

3 *Buchanan J.J.* Theorika. A Study of Monetary Distributions to the Athenian Citizenry during the fifth and fourth Centuries B.C. N.Y., 1962. 残念ながら，この本は筆者には入手不可能のままになっている。この本については *G.E.M.de Ste Croix* // CR^2. 1964. XIV. P.190の書評を参照。

4 Göttingische Gelehrte Anzeigen. Phil.-hist. Kl. 1929. Anm. 42.

5 *Cawkwell G.L.* Eubulus // JHS. 1963. No.83. P.55.

6 *Arist.* Ath.Pol. 43.1; cf. 47. 2; *Dem.* XVIII. 113; IG.II^2. 223 C 5; LSJ — *τὸ θεωρικόν*.

7 *Mossé Cl.* Athens in Decline 404-86 B.C. L., 1973; *Austin M.M., Vidal-Naquet P.* Economic and Social History of Ancient Greece: An Introductory. Berkeley, Los Angeles, 1977. Not.111; *Rhodes P.J.* The Athenian boule. Oxf., 1972. P.219.

8 *Buchanan.* Op. cit.

9 IG.II^2. 223 C 1.5; *Rhodes.* Op. cit. P.235,238.

10 *Pickard-Cambridge.* Op. cit. P.222; *Glotz G.* The Greek City and Its Institutions. L., 1929. P.342f.

11 cf. *Ferguson W.* Hellenistic Athens. L., 1911. P.473-476.

12 *Fine J.V.A.* The Ancient Greeks. A Critical History. Cambr., 1983. P.622.

13 cf. *Cawkwell.* Op. cit. P.54; *Rhodes.* Op. cit.（passim）.

14 *Jones A.* Athenian Democracy. Oxf., 1957. P.33f.

15 *Rhodes.* Op. cit. P.106.

16 *Dem.* LIX. 4-5; *Jones.* Op. cit. P.33.

17 *Cawkwell.* Op. cit. P.55f., 61. コークウェルは，テオリコンを管掌した同僚団の創設はエウブーロスの仕事に結びつけられ，その創設は前355年におかれる，と考えている。

18 cf. 例えば *Dem.* III. 11.

19 cf. *Dem.* I. 19-20; III. 10-12; 演説は前349年秋におこなわれた。

20 *Mitchel F.* Athens in the age of Alexander // Greece and Rome. 1965. 12. P.194.

21 *Rhodes.* Op. cit. P.108.

22 *Tarn W.W.* Greece: 335 to 321 // CAH. 1927. V. VI. P.441.

23 *Ferguson.* Op. cit. P.10. *Andreades A.M.* A History of Greek Public Finance. V. I. Cambr., 1933. P.375.

24 *Cawkwell.* Op. cit. P.58. Not.68の言及を参照。

25 Ibid. P.62.

26 Ps. -Plut. X Or. 841 C — 842 F; *Andreades.* Op. cit. P.377, 379.

27 IG.II^2. 130, 132, 206, 287, 342, 343, 351, 360, 373 など；cf. *Cawkwell.* Op. cit. P.64; *Andreades.* Op. cit. P.380.

28 *Hopper R.J.* The Attic Silver Mines in the fourth Century B.C. // BSA. 1953. V.48. P.239; *Lauffer S.* Die Bergwerkssklaven von Laureion. Wiesbaden, 1979.

29 *Hyper.* Pro Euxen. § 36; *Dem.* XLII. 17; *Calhoun G.M.* Ancient Athenian Mining // Journal of Economic and Business History. 1931. III. No. 3. P.339; *Hopper.* Op. cit. P.251.

30 *Andreades.* Op. cit. P.273.

31 *Calhoun.* Op. cit. P.336f.

32 *Din.* I. 96; *Dem.* VII. 12; XXXIII. 23; *Arist.* Ath. Pol. 52. 2-3; 59. 5; *Cawkwell.* Op. cit. P.64.; *Mossé.* Op. cit. P.91.

33 Syll^3. 326; IG.II^2. 1168; 1627. 1.352; *Hyper.* Fr. 23(118); *Philochorus.* Fr. 56a; *Ps.-Plut.* X Or. 852 A; *Paus.* I.29.

34 *Dem.* XXVII, XXXIII, XXXIV, XXXV; *Austin, Vidal-Naquet.* Op. cit. P.147, 291, 350.

35 *Rhodes*. Op. cit. P.238.
36 *Cawkwell G*. Demosthenes Policy after the Peace of Philocrates // CQ. 1963. 13. P.135; *idem*. Eubulus... P.57.
37 *Idem*. The Crowning Demosthenes // CQ. 1969. 19. P.169.
38 *Rhodes*. Op. cit. P.219.

附　　記

本翻訳はソ連（現ロシア）科学アカデミーの『古代史通報（Вестник Древней Истории）』1989-1に掲載された論文の全訳である。訳者は今から10年ほど前にある小論（「ヴェルイーナ第二墳墓と被葬者の問題—ピリッポス二世かピリッポス三世アッリダイオスか—」『史学雑誌』第94篇第4号）を執筆した折りに，必要に迫られて初めてロシア語の論文（А. П. Манцевич, "Открытие Царской Гробницы у Деревни Вергина в северной Греции (античная Македония)", *ВДИ* 1980-3）を読んだ覚えがある。それ以来，ロシア語の文献にはあまりふれる機会は無かったけれど，鹿児島大学に赴任して多少時間にゆとりがもてるようになってきたので，『古代史通報』の中の自分の研究に関係のある10篇ほどの論文をひろい読みすることができた。V.N.アンドレーエフ，L.M.グルスキナの論文が中心だったが，それらの論文は拙稿「ヘカトステー碑文再考—売却か賃貸借か—」『史学雑誌』第103篇第7号（1994）の中で議論することができた。

この翻訳を紀要に掲載するきっかけになったのは，学内の援助会研究援助費による個人研究助成を受けるにあたって，「ロシアにおける古代ギリシア史研究の現状」という研究テーマを設定したことと大いに関係がある。更に，古代ギリシア史の研究者は古代ギリシア，ラテン語に加えて現代ギリシア，英，独，仏，伊といった諸言語を読む能力を有しているのではあるが，ロシア語に関してはそれほど多くの人々が読んでいるとは必ずしも言いきれないところがある。したがって，ロシア語文献の翻訳を思いたった次第である。

もとよりロシア語の専門家ではない上に文法知識なども独学のため，多くの勘違いや誤訳があるにちがいない。また Kondratyuk の論文をあえて取り上げたのは，この論文が極めて優れているからという理由によるものでもない。あくまでも自分のロシア語の勉強のためということにある。これを契機として，次年度以降もロシア語文献の翻訳，紹介に努めてゆきたいと思う。